ハフハフハー

「みんなカラフル」

3年 S・Kさん

この本を読んでぼくは、わすれられない場面が二つあります。一つ目は、プハーがど力にど力を重ねてドクをなくし、なかまに入ることを受け入れてもらったことです。来る日も来る日も暗くなるまで森で遊んでいる場面は、そうぞうするだけでもうれしくてしかたなかったことがかたんにそうぞうできます。

ぼくは、この夏はじめてサッカー合宿にさんかしました。知らないともだちばかりではじめはきんちょうしてじこしょうかいの時は、すきな食べ物をきらいなやさいと言ってしまうほどでした。でも勇気を出して自分から話しかけてみたら今までのきんちょうがまほうでとけたようにうれしさに変わりおしゃべりが止まらず夜もなかなかぬれませんでした。だから、プハーが受け入れてもらった時は、どれほどうれしかったかだれよりもぼくがわかります。

二つ目は、やっとなかよくなつた森のともだちからどくがこわいんだと言われてまたひとりぼっちになってしまい「そうだよね、ごめんね・・・。」と言ったプハーの言葉です。自分のからだのことは自分が一番よく知ってるし、やっぱりどくがこわいって言われたらそれいじょう、なにも言えないし、ごめんねがすごく切なく聞こえました。

考えてみるとぼくは、どうしようもないときは、いつもだれかに助けてもらったり、言いわけしたり、にげたり、知らんぷりをしてきたような気がします。ぼくとプハーはにていると思っていました。全くちがったです。どくがあることは悪いとは思わないことにし、ありのままの自分のすがたを受け入れることができるようになったのです。プハーにはプハーの役わりがあって、とつても大事なことだとあの日、森のみんながそれぞれ感じてわすれていなかったことが元氣なあまみをつくっているんだと思いました。

あまみには固有種がたくさんある島と聞いています。きつと、当たり前前にめずらしいちがう生き物がたくさんいてみなそれぞれのいばしょで、ありのままにどうぞうとくらしているんだなと思います。そんなカラフルな島に来年の夏休みは行ってみたいと思いました。そして、ぼくもプハーのような考え方、成長ができるようにかっこいい男を目指します。